

第32回BELCA賞 ロングライフ部門受賞建築物選考評

ディップェンドルファー記念館（東棟）

所在地：東京都三鷹市大沢3-10-2
竣工年：1958年
用途：大学（学生会館 兼 講堂）
建物所有者：学校法人 国際基督教大学
設計者：ヴォーリス建築事務所（新築）、株式会社 一粒社ヴォーリス建築事務所（修繕）
施工者：大成建設株式会社（新築）、松井建設株式会社（修繕）
維持管理者：学校法人 国際基督教大学 管理部

周辺に野川公園や国立天文台、調布飛行場のある緑豊かな環境のキャンパスは戦前、中島飛行機の三鷹研究所であった。正門より続く長い直線のアプローチ道路「マクリーン通り」通称「滑走路」も当時の遺構であるが、実際に滑走路として使われたことはないようだ。中島飛行機の研究本館であった現大学本館と広場を挟んで対峙しているのが、ヴォーリス建築事務所的设计によるディップェンドルファー記念館（東棟1958年竣工）である。キャンパスの初期計画でヴォーリス建築事務所は他に本館増築（1952年竣工）、大学礼拝堂（1954年竣工）、シーベリー記念礼拝堂（1959年竣工）を設計しているが、ヴォーリスは1964年に永眠し、その後のキャンパス計画はレーモンド設計事務所に引き継がれていく。

ディップェンドルファー記念館は、教職員、学生の交流場として日本で最初に構想された学生会館兼講堂であるという。大学の文化の要として大切に使われ続けられており、今回の応募対象の改修工事でも、モダニズム建築の特徴である外壁のコンクリート打放しやバルコニーのPC製手摺、初期の国産アルミサッシ、コペンハーゲンリブの内壁などの意匠を注意深く維持している。今回の応募は1980年代からの継続的な維持保全改修に加え、2020年以降の外装内装と空調、電気、給排水、バリアフリーまでの広範な改修を受けてのものである。外装ではクラック補修や屋上スラブ断熱はもとより、打放外壁とPC製手摺の補修と洗浄、サッシの保存と改修、一部の壁のモルタル掻き落とし色の復元とタイル保存補強と色合わせ張替え等、竣工時デザインを尊重した改修が行われている。

空調では当初の暖房の代わりに冷暖房の空調設備を建物全体に導入し、諸室の空調をマルチパッケージ形空調機へ更新、既存の天井高を変えずに天井からの吹き出し形式に変更している。注目すべきはアルミサッシの交換で気密性の高いサッシに交換しているが、珍しい初期のアルミサッシの細身でシャープな表情を残すために肉厚で細い四方枠とし中棧は一枚ガラスの表面に付け枠としている。複層ガラスとして断熱性能を向上させるよりも当初デザインの維持が優先されている。講堂も空調の熱源を別棟の集中熱源から空気熱源ヒートポンプユニットへ更新しているが、空調ダクトは以前のままで制気口のみ交換し、当初のコペンハーゲンリブの壁と網代の天井を残し意匠上の目立った改変は生じていない。一方、車椅子使用を想定し、エレベーターと誰でもトイレを設置し、新に設けた入口を自動ドアとしてバリアフリー化も図っている。

改修工事を終えて再認識された建築価値の継承を目指し、館内掲示とキャンパスツアーや歴史学授業による継承活動に取り組んでいることも評価したい。